

## SJ Interview

## SJ インタビュー

## 子連れで安全・安心に移動ができる 子育てしやすい環境づくりをめざして



宇都宮大学  
地域デザイン科学部  
社会基盤デザイン学科

教授 **大森宣暁** さん

交通計画を専門とする大森さんは、子連れで外出しやすい環境づくりをめざし、人々の子育てに対する意識変容を促す研究を手がけている。幼児・児童を持つ子育て世帯が直面している移動の制約(バリア)を緩和するための取り組みなどについて、大森さんにうかがった。

### ベビーカーや子ども乗せ自転車を 利用する人は移動制約者

大森さんは、人間の毎日の生活活動と交通行動との関係を理解するための研究を学生時代から続けている。その対象は若者、高齢者、障がい者と幅広い。

子ども連れの移動に着目したのは2007年のこと。「私自身が子育てをするようになったこともあり、子どもと一緒に安全・安心に移動ができる子育てしやすい街づくりをめざす必要があると考えました」と大森さんは振り返る。

「都市部においては、移動にベビーカーや子ども乗せ自転車を利用することが多く、子連れで外出すると、様々な困難に直面します。つまり、ベビーカーや子ども乗せ自転車の利用者も高齢者や障がい者同様、移動制約者に分類することができるわけです。子育て中の人が外出しやすい環境を整備するためには、子連れ特有の制約(バリア)を緩和することが必要だ。大森さんは子育て中の人の日常生活を制限するバリアを次の6つに分類・整理した。

- ①交通システムに関するバリア
- ②活動機会に関するバリア
- ③子育て支援サービスに関するバリア
- ④子どもの存在によるスケジュールの制約に関するバリア
- ⑤子育て生活に必要な情報に関するバリア
- ⑥子育てに対する人々の意識・理解に関するバリア

これらのバリアの緩和に向け、大森さんは学会での活動を通じ、国や関係諸団体などに働きかけを行った。

研究を開始した時点では、子どもの発達段階に沿った外出時の注意やマナーを解説する資料は少なかった。そのため、大森さんは子連れで外出する際に注意すべきこと(右上参照)をまとめたテキストの作成に携わったり、子連れの外出教室などで保護者にベビーカーや子ども乗せ自転車の安全な取り扱い方と利用時のルール・マナーを啓発した。

### ベビーカーや子ども乗せ自転車に 周囲の人々が配慮してほしい

近年は道路や公共交通機関、商業施設などのバリアフリー化が進められ、一昔前と比

べると子連れで外出しやすい環境が整ってきたといえる。

「ただし、子育て世代に対する社会の理解はまだ十分とはいえません。そのためにも、ベビーカーや子ども乗せ自転車の利用者が今以上に安全・安心に移動できる環境をつくる必要があります。周囲が、利用者の立場や大変さを思いやりを持って理解してあげることが大切です。『道路も公共交通機関も商業施設も公共スペースなので、みんなで譲り合って使っていきましょう』という考えは、ここ10年で徐々に浸透してきています」。

そして、大森さんは2023年度から(公財)国際交通安全学会で「子育てしやすく子どもにやさしい交通環境実現のための教育・行動変容プログラムの開発と適用」という研究調査プロジェクトに取り組んでいる。「ベビーカーや子ども乗せ自転車について、周囲が配慮する必要があることを広く啓発していきたいと考えています。日本の都市特性や社会的・文化的背景を十分に考慮した教育プログラムを完成させ、これを子育て予備軍である若者に適用することで、より安全・安心な子連れの移動が実現でき、子連れや子どもが被害者になる事故を減らすことにつながるでしょう」。

昨年12月、プロジェクトでは宇都宮大学を含む3つの大学・短期大学の学生123名を対象に子連れでの移動に関する講習会を実施。子どもを想定した重り(人形)ののせたベビーカーの押し歩き、子ども乗せ自転車の運転を学生たちに体験してもらったのである。

「座学では、ベビーカーに子どもを乗せたままエスカレーターを利用してはいけないことを伝えました。事前にとったアンケートでは『エスカレーターに乗る時にベビーカーに子どもを乗せたまま利用するのが望ましい』と答えた学生が3割ほどいました。また、子ども乗せ自転車は車道通行が原則ですが『歩道通行が原則』と答えた学生が約半数いました。講習会の後のアンケートでは『ベビーカーや子ども乗せ自転車を利用している人に普段配慮するという意識が今までなかったけれども、配慮してあげる必要がある』と意識変容がみられ、男子学生においては子育てに対する興味関心が女子と同じレベルに高まっていた」。

## ●子どもと一緒に外出する際の主な注意点●

### エレベーター

- ・エレベーターの扉の届く位置に子どもやベビーカーを近づけないようにしましょう
- ・乗り降りは必ず子どもと手をつなぎましょう
- ・混雑している時は無理に乗り込まず見送るなど、ゆとりを持って行動しましょう

### エスカレーター

- ・エスカレーターは子どもと並んで乗り、手をつなぎましょう。まだ、小さい子どもを一人で乗せないようにしましょう
- ・ベビーカーやショッピングカートに子どもを乗せたまま乗車することは絶対にやめましょう

### 自転車

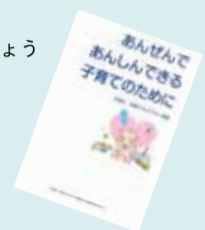
- ・自転車に乗せられる子どもの人数や乗せ方にはルールがあります
- ・子どもを抱っこしながらの自転車の運転は禁止されています
- ・子どもは自転車用チャイルドシート(補助いす)に乗せ、必ずヘルメットとシートベルトを

### 路線バス

- ・車内では決められた場所にベビーカーを置きストッパーをかけておきましょう
- ・ベビーカーに赤ちゃんが乗っているときは側を離れずベビーカーを支えています
- ・ベビーカー使用でも、だっこひもやおんぶひもを持ち歩きましょう
- ・急停車に備えて座っているときも、だっこひもをするようにしましょう

### 電車

- ・子連れのときは時間に余裕をもって、混んでいる時間帯はできるだけ避けましょう
- ・ベビーカーで乗車したときには必ずストッパーをかけて目を離さないようにしましょう
- ・ホームではベビーカーに必ずストッパーを。水はけのためにホームは斜めになっています



子育て・子育てバリアフリー教室テキスト作成プロジェクト「あんぜんであんしんできる子育てのために」より一部抜粋

教育プログラムの完成をめざし、プロジェクトは2024年度以降も続く。

### 自転車利用者の意識変容を促す 効果的な情報提供とは？

このほか、大森さんは自転車を安全に利用してもらうための情報提供の手法についても研究している。

東京23区と北関東3県(群馬県、栃木県、茨城県)に居住する1100名(20~70代)に対し、Webアンケートを通じて、子ども乗せ自転車に関する情報提供を行い、意識がどのように変化するかを調査※1。これに加え、東京都市圏居住者で6歳未満の子どもを持つ保護者29名を対象に、子ども乗せ自転車安全教室(講義と電動アシスト付き子ども乗せ自転車の試乗)を実施した。

「情報提供によって、利用者の安全意識が向上すること、対面での講義と試乗によって、より効果が高まることを確認できました。子どもの保護者には、ヘルメットやシートベルトの着用など具体的な行動に関する情報を提供していくことが必要だといえます。子育て中でない方々にも、子ども乗せ自転車や利用する人の大変さを知ってもらうこと、子ども乗せ自転車利用者に配慮しようという意識が向上することも明らかになりました」。

また、自転車関連事故の当事者は若年層が多いことから、高校生と大学生への情報提供の手法に関してWebによるアンケート調査を実施した※2。対象は宇都宮市の高校生932名と大学生208名。高校生・大学生に多いと考えられる法令違反の傘差し運転、ながらスマホ、押しチャリ※3に対する意識と実際の行動を質問。さらに傘差し運転、ながらスマホの抑制、押しチャリの促進のため、心理的リアクタンス※4に着目した複数の情報提供によって意識変容の違いを検証した。

提供する情報は2種類の文章と2種類の写真を組み合わせた計4種類を作成。調査対象者を性別・学年の偏りがないよう4グループに分けて、各グループに異なる情報を提

供した。

例えば、傘差し運転の文章は「傘差し運転は危険であり、法律違反です。傘差し運転による視野の低下やブレーキの効きが悪くなるのが原因で、相手に怪我を負わせて、高額な賠償金が請求されたり反対にあなた自身が死傷したりします」とグループ1~4に説明。最後の一文をグループ1、2は「傘差し運転は絶対にやめましょう」という命令的メッセージ、グループ3、4は「それでも良いのであれば傘差し運転をするか、しないかはあなたの判断に任せます」という放任的メッセージとした。写真については、グループ1、3はルール遵守(傘差しをせずにレインコートを着用して自転車を運転している写真)、グループ2、4にはルール違反(傘差し運転をしている写真)を使用した。

「この結果、高校生にはすべての情報提供で意識変容に有意差が認められました。一方、大学生には命令的メッセージでは効果がなく、放任的メッセージとルール違反をしている写真を組み合わせた情報が有効であるという興味深い知見を得ました」。

適切な情報提供によって自転車利用者にルールを守ってもらうことはもちろんだが、すべての交通参加者がお互いの立場を理解し、思いやりと譲り合いの心を持つことが安全を確保する上で必要不可欠だと大森さんは強調する。

※1 大森宣暁、岡安理夏、長田哲平、青野貞康「子ども乗せ自転車利用環境改善のための情報提供および安全教育の効果に関する研究-態度・行動変容理論に基づく評価」『都市計画論文集』Vol.53、No.3、pp.1420-1426、2018年

※2 服部直樹、大森宣暁、長田哲平「心理的リアクタンスに着目した自転車安全利用に関する情報提供の効果検証:高校生・大学生を対象として」『交通工学論文集』Vol.7、No.2、pp.A.60-A.67、2021年

※3 宇都宮の中心市街地にあるオリオン通り(アーケード商店街)では、日中は自動車通行禁止となり、自転車・歩行者専用になるため、歩行者が安心して通行できるよう、自転車利用者には降車して歩く「押しチャリ」が推奨されている。

※4 自分が自由に選択できると思っていることに対して制限や強制をされてしまうと、抵抗や反発感情が生じる現象。